ナノハナ販売会開催！

10月10日（日）、今年2回目となる、オモニ会主催のナノハナ販売会が行われました。新型コロナウイルス感染拡大により毎年開催していたバザーが開催できない中、昨年から始まった完全予約制のナノハナ販売会。オモニ会のすべての知恵と力を注ぎ、**今年は８月、１０月、１１月の３回開催する予定**である。また、開催日にはアボジ会、学校教育会、学校教職員、女性同盟、朝青、青商会も加わり学校支援の一大イベントとなった。３回を通じて同胞たちはもちろん、**近隣住民や日本の友人たちなどより３００以上の注文が殺到。**購入者からは、このような時期だからこそ頑張っているオモニ会をはじめとした学父母や教職員に暖かいエールが送られた。

学校販売

千葉支部販売所

西部支部販売所

数日間、準備してきたオモニ会

続々と買いに来る

ちょっといい話

ナノハナ販売会の最中に、アボジ会が自主的に「一日労働」

ドア修理

廊下掃除

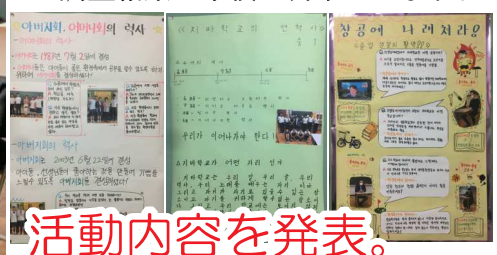
卒業生による特別課外授業　開催

9月18日（土）、千葉ハッキョ連合同窓会の協力のもと、中級部生を対象とした**特別課外授業**が行われました。講師は千葉学校29期卒業生、現在はシドニー大学で日本語講師を務めるソンヨンスク氏。授業は二部構成で行われ、第一部ではアメリカ、イギリス、オーストラリアと様々な外国を渡り歩いてきたソンヨンスク氏が、海外で得た経験について。学生たちも、事前に準備し調べた学習の内容を発表し、双方向でのやり取りの中、海外についての知識を深めていきました。第二部では、英語圏の国で実際に使われている英語を学び、先生と学生たちが習ってきた英語で会話をしました。意味は似ていても、話す相手や、国によって言葉を変えなくてはいけないということなど、実際に海外で生活して知っているからこそできる授業でした。

千葉学校少年団による創立７５周年企画

千葉学校少年団では、よりウリハッキョについて学ぶために**①アボジ会、オモニ会の歴史、②千葉朝鮮学校の沿革史、③卒業生たちの活躍について**自分たちで調査した。調査はインタビューを基本に、歴史的な事実たけでなく関連した人たちの熱い思いや苦労などを直接聴き、学びを深めた。

※調査結果は学校に掲示してます。



活動内容を発表。
学校に来たら見てね

編集後記

9月13日に千葉朝鮮初中級学校が創立75周年を迎えた。75周年実行委員会だけでなく、学生たちも学校創立75周年をお祝いした。75年という歳月を振り返ると、三世代を超え4世代、5世代と代を継いでいる。様々な資料を紐解き千葉学校の歴史を整理する過程で、なぜ過去を振り返るのかという疑問にぶち当たる。目の前に大きな問題がある。学生数の減少や学校財政の慢性的な赤字…それを解決するだけでも大変なのに。しかし、実際に歴史を整理するとその意味がなんとなく見えてくる。輝かしい歴史も苦難の歴史も、この日本社会の中で朝鮮人としての誇りのために朝鮮学校を築き、守ってきた人々の想い。それを真摯に受け止める中で、見えてくるものとはなにか？学校の歴史とは卒業生や同胞たちの愛校心のもっとも根底にある土台なのかもしれない。時とともに風化する歴史的な事実をしっかりと後世に残すことで、過去は未来の子どもたちの貴重な財産となると思う。

千葉朝鮮初中級学校物語（7）

千葉民族教育財政事業の伝統と教育会

旧校舎学校建設

ウリ民族フォーラム in 千葉

ある愛国一世の証言記録に朝連千葉朝鮮初等学院の2代目校長をされた盧晟容先生が当時、教員の給与などの学校財政を確保するために同胞の家を毎日、訪問して寄付を集め、また、千葉市、千葉県に財政支援をお願いしたが断られ、お金がどうしても集まらず自分の家族が食べるために買った米を炊いて先生たちと一緒に食べた内容が記載してある。これは当時、朝鮮学校の財政事情の一コマであるが、千葉民族教育の草創期から財政事業が難しかったことがうかがえる。総連結成前は、主に学校財政支援の主軸はＰＴＡであった、実際に学校閉鎖後も自主的な学校を維持するための団体（教育会）があったという話がある。正式に教育会が創立したのは、１９５５年5月以降である。初代教育会会長は康景寿先生、2代目会長が南哲雄先生（その後、千葉地域商工会初代会長）である。学生数が急増する中、教員たちを増やし、子どもたちの学習環境を整備するための財政確保は決して楽ではなかった。学校財政事業の大きな転機は、祖国からの教育援助費である。１９５７年4月19日の第一次に始まり、祖国がどんなに苦しくても、海外に住む朝鮮児童のために送られた教育援助費。60年代の財政収支報告書をみると、学校予算の29％が教育援助費でまかなわれている。教育援助費が民族教育の「生命の水」と言われるが、決して大げさではない。もし、教育援助費がなければ民族教育は続いていないだろう。当時の状況を象徴する話がある。「朝鮮学校ボロ学校」…風が吹けば砂が積もる教室と廊下、雨がふると雨漏りをうけるバケツの音を聞きながら勉強した子どもたち。台風が来ると窓ガラスが飛ばないように釘を打ち、冬は冷たい風で子どもたちは「先生、手がかじかんで字が書けません」と半分笑い、半分泣いていた。日本の子どもたちは「チョウセンガッコウボロガッコウ」と馬鹿にしたが、朝鮮学校の子どもたちは「朝鮮学校ボロ学校、いってみればいい学校！」と悔し涙を流した。（学校創立４０周年記念文集より）66年7月に千葉県教育会が総連中央より模範教育会称号を授与されている。大きな理由は、新校舎建設と全同胞的な運動である。総予算５５００万円。松並木が有名だった千葉市浪花町に土地を購入し、「お金がある人はお金を、知識がある人は知識を、力がある人は力」をスローガンに掲げ、各同胞家庭では「毎日5円貯金運動」を展開。当時の5円とは夕食のおかず一品程度の値段である。多くの同胞が貧しい中でも、できることをやろうと始めた。また、同胞商工人たちは莫大な建設基金を費やし、オモニたちは廃品集めなどの運動を独自に展開した。新校舎建設に関与した人数は３５００名以上といわれている。新校舎（旧校舎）竣工式で祝賀演説をされた韓徳銖総連中央議長は、千葉で朝鮮学校がこのように立派に建てられたのは同胞たちの団結した力があったからこそであります。柱ひとつ、瓦一枚に千葉同胞たちの想いと希望が込められていますと話されている。この輝かしい歴史の裏には、同胞商工人の役割が大きい。鄭應玉先生、張永化先生などその後も教育会会長などを歴任し学校を支え続けた。79年の新校舎（現在の校舎）を含め教育会はいつも同胞たちと一緒に運動の中心的役割を担ってきた。

現在、朝鮮学校の財政を支える教育会も世代交代し、今、４０代、５０代の若手同胞商工人が中心となっている。２００８年のウリ民族フォーラムIN千葉を機に「一人の百歩より、百人の一歩」という新しいスローガンが掲げられた。これは決して新しいものではない。愛国一世、二世が築いてくれた千葉民族教育の伝統である。いつの時代も学校財政を支えたのは、勇気ある同胞たちである。教育会はその想いをカタチや仕組みにする仕事である。その伝統の力で新型コロナウイルスの脅威による千葉民族教育史上、最大の危機を乗り越えることが出来た。新型コロナから学校を支える基金、オモニ会のナノハナ販売会はまさに後世に語り継がれるであろう。

※　※　※

千葉朝鮮学校の掲示板を支える柱に安寿烈先生の名前が刻んである。安寿烈先生は60年代後半、千葉と船橋の学校を合併し、現在の浪花町に学校を建設する際に先頭に立って民族教育に貢献された方である。今も当時を知る方は、先生の名前を記憶している。千葉朝鮮学園の許認可においてもその功績は大きい。千葉民族教育の歴史は、すべての心血を注いだ同胞たちの歴史なのかもしれない。学校創立１００周年に向けて、その偉業を後世に伝えていきたい。